

*The Chameleon* における唯美主義と同性愛  
—— 私的、公的空間の間で ——

金 田 仁 秀

**Aestheticism and Homosexuality in *The Chameleon*:**  
Between Private and Public Space

Masahide KANEDA



# *The Chameleon* における唯美主義と同性愛

—— 私的、公的空間の間で ——

金田 仁秀

群馬大学共同教育学部英語教育講座

(2023年9月27日受理)

## Aestheticism and Homosexuality in *The Chameleon*: Between Private and Public Space

Masahide KANEDA

Department of English, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 27th, 2023)

### 1. はじめに

イギリス 19 世紀後半の男同士の絆や愛情を描き出す文学に対して、同性愛文学と呼ぶのは、同性愛 (homosexual) という語が初めて文献上で使用されたのが、*The Oxford English Dictionary* によると 1891 年であることを考えると、不適當なのかもしれない。実際、当時、大陸の性科学にも精通した John Addington Symonds は、主に “Uranian love” という表現を用いたし、同じく性科学の知識を得ていた Edward Carpenter も同性愛という言葉を使いながらも、自らの講演のタイトルには “Homogenic Love” という語を充てた。一方、男性間の性的関係については、生殖と結びつかない「反自然」の行為全般を指すソドミー (sodomy) という語が知られており、16 世紀に始まるソドミー法は、そうした行為を取り締まり、処罰を与えていた。したがって、ある人々にとっては、同性間の性的関係はソドミー以外の何物でもなく、宗教的にも倫理的にも非難されるべきものであった。しかしながら、どのように呼ばれようとも、そうした関係は古くから存在した。そしてそれは欲望として共有されるものであった。

イギリスでは、18 世紀にはモーリー・ハウスと称された、同性間の欲望を抱いた人々が集まる場所が誕生したし、19 世紀に入った後も男娼や同性愛のサブカルチャーが存在したことは、裁判記録などからも分かっている。また、パブリック・スクールでの生徒間の性的関係も伝えられているし、Oxford での Plato を通した “Greek love” の認識は、同性間の関係を正当化するのに役立った。1889 年の Cleveland Street にあった売春宿の捜索を発端とする事件や 1895 年のワイルド裁判などは、下層から上流まで、また金銭目的から美的昇華や高貴な精神まで、同性間の欲望が様々な形で存在していたことを伝える。

忌避と禁止に彩られた同性間の欲望は、社会のメインストリームで堂々と表されることはなかったものの、文学をはじめとした芸術作品では、比喻や仄めかしを通して共有された。また、社会の側でも、語ること自体が控えられたために、報道においても明示を避ける傾向にあった。したがって、19 世紀後半のイギリスにおける男性同性間の欲望は、社会との緊張関係を常に孕みながら、私的、公的空間を行き来していたといえる。ワイルド裁判が示唆するように、行き過ぎは破滅を意味した。それでも秘密と

しての男性間の欲望は確実に存在したのだ。

こうした欲望を共有したコミュニティを作る一つの手段は、秘密結社のようなものを創設することであった。George Cecil Ives の *The Order of Chaeronea* はその例である。モーリー・ハウスもまたそのような機能を持っていた。しかもパブという装いであったという点では、より開かれたもの—それゆえにより危険に晒されたもの—であった。19世紀後半の文学作品についていえば、ポルノ小説のような閉じられた空間で比較的安全に流通したものもあった。一方で、雑誌のような開かれた空間では、比喩や間接的な表現を用いて、同性間の欲望は表された。消費文化の発展において、雑誌は共有される重要な媒体であったが、それは、特定の人物を対象としながらも社会の中に潜みつつ、コミュニティの形成に寄与したのだ。

Laurel Brake は、Gleeson White 編集時の *The Studio* や Charles Kains Jackson 編集時の *The Artist and Journal of Home Culture* を同性愛雑誌と指摘しているが、それは“the specialist nature of its contents and the appeal of its titles to a specific niche of readers”ゆえに、“class journalism” (111) と呼ばれるものであった。これらは編集者主導の雑誌として、その人物を中心に男性同性間の欲望を描き出した。とはいうものの、*The Studio* にしろ、*The Artist* にしろ、決して同性愛のみを扱っていたわけではなかった。雑誌のタイトルが示唆するように、これらは芸術に関する議論や作品を掲載する中に、同性愛的欲望を忍ばせたのだ。Wilde の恋人として知られる Alfred Douglas 編集時の *The Spirit Lamp* も、同様の手法で、そうした欲望を散りばめた。

*The Spirit Lamp* は Oxford の学生雑誌として流通したが、Douglas が大学を去った際に廃刊となった。ある意味で、その後継といえる雑誌が *The Chameleon* である。この二つの学生雑誌は、*The Studio* や *The Artist* とは掲載された記事の量や流通した冊数の点で劣るものの、割合の観点からすると同性愛要素がより強い。<sup>1</sup> しかしながら、これらの雑誌が論じられることはほとんどない。とりわけ *The Chameleon* については、ワイルド裁判との関係で Douglas の詩と“The

Priest and the Acolyte”が知られているにも拘わらず、それらでさえ表現や内容が詳述されることはなく、ましてや他の作品や雑誌全体の位置付けなども論じられていない。確かにこれらの文学的価値については議論の余地はあるかもしれない。しかしながら、*The Spirit Lamp* と共に、この雑誌には、唯美主義やデカダンスと同性愛の関係という文学的、芸術的事象の観点からも、見逃せない要素がある。そこで本論では、雑誌 *The Chameleon* を取り上げ、そこに掲載された作品における同性愛描写に目を向けることを通して、この雑誌の特異性と位置を考察したい。そして、当時の同性愛の言説と芸術の関係を垣間見たい。

## 2. 背景と構想

*The Chameleon* の前身ともいべき *The Spirit Lamp* は、1892年5月から Sandys Wason の編集の下で刊行された。そして10巻目となる1892年12月発行の Vol.2. No.IV. から Douglas に編集の手が渡り、同性愛要素の濃い雑誌へと変貌した。といっても、Wason の編集時において、まったく同性愛の要素がなかったわけではなく、Douglas 編集時でも引き続き同性愛作品を寄稿した P. L. O. こと Percy Lancelot Osborn の少年愛を題材としたギリシャの詩の翻訳も掲載されていた。また、Wason は Wilde に寄稿を依頼したように、文学作品や評論等も題材としていた。しかし、原稿を断られたこともあって、Wilde を揶揄した評論を載せている点では、唯美主義やデカダンスを擁護する Douglas 編集時と大きく異なる。Douglas は、Vol.4. No.I. において上演禁止となった Wilde の *Salome* の評論で、“those who are healthy to live and do not live to be healthy, will find in Mr. Oscar Wilde’s tragedy the beauty of a perfect work of art” (27) と述べてこの劇を称賛した。また Vol.4. No.II. に掲載された Gleeson White による“In Praise of Idleness”と H. M. Beerbohm による“The Incomparable Beauty of Modern Dress”では、どちらも Wilde を彷彿とさせるような唯美主義的主張を見ることができ。おそらく Douglas が大学を去ったことが *The*

*Spirit Lamp* が 1893 年 6 月の発行を持って廃刊となった理由と考えられるが、同性愛と唯美主義やデカダンスという特徴は、*The Chameleon* でも引き継がれることとなる。

*The Chameleon* がどのような構想から生まれたのかは、それほど明確ではない。J. E. Chamberlin によると、当初は *The Parrot Tulip* という雑誌名が予定されていた。しかし、George Ives、John Francis Bloxam、Wilde が、Albany にあった Ives の部屋で会った際、Ives が *The Chameleon* というタイトルを提案したことによってこの名前になったとされる。またこの時に Bloxam は、Wilde から警句の寄稿の約束を取り付けたとされている(81)。この会合は、Wilde の創作にも影響を与えている。例えば、*The Importance of Being Earnest* において、Jack は自分の家を Lady Bloxham に貸していると話しているが、これは綴りを変えているものの Bloxam を意識した言及と考えられる。また架空の人物 Ernest が住んでいる場所が Albany であるのも、Ives の部屋を示唆している。

編者となった Bloxam は当時、Oxford 大学の Exeter College の学生であった。彼は、最も問題を引き起こすこととなる“The Priest and the Acolyte”を執筆していた。雑誌での公表前にそれを読んだ Wilde は、彼に出版を勧めたという(Ellmann 404)。この物語と共に *The Chameleon* の最後に掲載された“At Dawn”も Bloxam の作とされているが、その他の作品は知られていない。Timothy d’Arch Smith によると、彼は *The Artist* に掲載してもらおうと Jackson に数編の詩を送ったものの、掲載はされなかったという(“On *The Chameleon*”)。したがって、Bloxam が文学の分野で活躍することはなかった。J. Z. Eglinton によると(40–41)、彼はワイルド裁判終了の数週間後に Exeter College を卒業した後に Ely Theological College に進み、1897 年から 98 年に英国国教会の聖職の位階を得た。その後、Exeter に戻って修士号を取得し、第一次大戦中での英軍における短期間の司祭職を除いては、ロンドンの様々な場所で聖職に就き、1928 年にこの世を去っている。彼の性的指向は不明であるが、“the young man . . . grew up to be a priest who cared enough about boys to help many of

them in London’s more impoverished post-war days, both in rich and poor parishes” (41) という Eglinton の説明は、彼の物語の主人公の少年への愛を思い起こさせる。

Ives と Wilde との会合を経て、*The Chameleon* は年に 3 冊の発行予定で、1894 年の 12 月に第一号が刊行された。その際、Robert Lewis Stevenson の *The Dynamiter* からの一節である“A Bazaar of Dangerous and Smiling Chances”という副題が付けられた。出版を手掛けたのは Gay and Bird であったが、Smith は、Theodore William Wratlaw が Bloxam にこの出版社から出すことを提案したと推測している(“On *The Chameleon*”)。というのも、Wratlaw は前年に Gay and Bird から詩集 *Caprices* を出版していたからである。Wratlaw は、White、Ives、Douglas、Wilde、Jackson らと親交があり、Jackson 編集下の *The Artist* に明白な同性愛詩である“To a Sicilian Boy”も掲載していた。但し、彼の詩集において明白な同性愛詩といえるのは少なく、この詩と“In Summer”と“L’Éternel Féminin”くらいである。実際、もっとも包括的な Uranian 詩人のアンソロジーである、Michael Matthew Kaylor 編集の *Lad’s Love* にも彼の詩は収録されていない。とはいうものの、Douglas、Wilde、Jackson、White といった同性愛作家に捧げられた詩が *Caprices* に含まれていることや、1933 年の死の直前に *Oscar Wilde: A Memoir* を書き、彼との邂逅の回想を記録していることなどからすると、彼は紛れもなく Uranian サークルの一人であり、唯美主義やデカダンスと結びつく存在であった。<sup>2</sup> 彼が *The Yellow Books* に寄稿していることや、1896 年に出版した詩集 *Orchids* が Beardsley や Wilde などデカダンスと結びつく作品の出版を手掛けた Leonard Smithers から出ていることも、このことを裏付けている。Gay and Bird はまた、1894 年に Alan Stanley の同性愛詩集 *Love Lyrics* も出版していた。主としてアメリカの作家の作品をイギリスで出版することを専らとし、特に逸脱的な書籍を手掛けていたわけではないものの、*The Chameleon* が Gay and Bird から出版されたという事実は、同性愛や唯美主義を取り巻く一連の人々とこの雑誌の密接な繋がりを表して

いる。このことは、この雑誌が100部限定で出版されたことから示唆される。*The Chameleon* は雑誌でありながらも、限られた人の中で共有されることに主眼が置かれていたのだ。その意味では、内容的には挑戦的であるものの、大きな社会改革を意図するものではなかった。

しかしながら、誰もが購読し、また投稿できる雑誌として、秘密裏に内輪でのみ流通したわけではなかった。例えば Symonds は、同性愛についての論考である *A Problem in Greek Ethics* や *A Problem in Modern Ethics* を私家版としてのみ印刷した。そしてそれらは信頼できる知り合いに配布するだけで、決して世間の目に触れさせなかった。また、明白な同性愛ポルノ小説である *The Sins of the Cities of the Plain* やその付録とされた *Letters from Laura and Eveline* も限られた冊数のみ出版された。<sup>3</sup> こうした手法が取られたのは、当時、同性愛を扱う書物の出版は危険を伴っていたからである。先に触れた Wratislaw の “To a Sicilian Boy” についても、版によっては *Caprices* で差し替えられたと Smith は指摘する (*Love in Earnest* 86)。確かに、詩の場合は、散文に比べれば同性愛的欲望を描くことが可能であった。そのため、同性愛に触れることに慎重であった Symonds も、かなり大胆な同性愛詩を発表している。それでも、例えば Havelock Ellis の科学的な書物である *Sexual Inversion* でさえも卑猥な文献として裁判沙汰になり、発禁処分となったのが当時のイギリスにおける同性愛文献を取り巻く状況であった。Wilde の *The Picture of Dorian Gray* は、Basil の感情の吐露に同性愛を見出すことができるものの、小説全体を通した唯美主義的側面や曖昧性によって、その明示性は抑制されている。同性愛を描くことは、社会との緊張関係を常に孕んでいた。その点で *The Chameleon* は、限定版という形で制限がありながらも、まったく社会から隔離するのではなく、社会との交渉の場に身を置いていた。

実際 *The Chameleon* は広告も出している。例えば *The Athenaeum* に載せられた広告では、“Number One Now Ready” という見出しの下、100部の限定版で年に3回の発行、購読料は15シリングであることが

記載された後に、大きな文字で副題を含めたタイトルが記されている。その後、寄稿者として Wilde、Jackson、Max Beerbohm、Douglas、Lionel Jackson (Johnson の誤記)、J. S. Green、Bertram Lawrence、Nicholson、Charles Hiatt の名が挙げられ、すべてのタイトルが記述されている。Wilde の名前が大きな宣伝効果となったことに疑いの余地はない。1894年12月3日付の *The Globe* での “Oxford Jottings (From Our Own Correspondent)” と題された記事は、Wilde が寄稿者の一人であることを告げながら、“it may be expected to change the colour of its sins with each appearance” (6) という言葉を添えている。また同年12月8日付の *The Academy* も週末に第一号が出ることを告げながら、Wilde、Douglas、Beerbohm、Johnson の名を挙げ、限定であるので興味のある人はすぐに出版社に連絡することを勧めている (“Notes and News” 472)。既に Wilde は、*The Picture of Dorian Gray* や *Salome* を出版して論争を巻き起こしていただだけではなく、ダンディたちの巧妙な警句に満ちた *Lady Windermere’s Fan* や *A Woman of No Importance* も上演され、人気を博していた。したがって、彼の名が付された *The Chameleon* が注目を受けたことは不思議ではない。ひまわりの花を手を自己宣伝をしていた奇抜な Wilde は過去の出来事であったが、彼と Douglas を揶揄する小説 *The Green Carnation* が示唆するように、Wilde のイメージは唯美主義やデカダンスであった。Stevenson からの副題も含めたタイトルのいかがわしさも相まって、*The Chameleon* は100部の学生雑誌とはいえ、自らが考えた以上に、社会に開かれたものとなったといえる。11月30日付の *The Glasgow Herald* に掲載された記事は、*The Chameleon* のそうした位置を照らし出している。

I hear that the new magazine which is to represent the extremists among the English decadents is to be called “The Chameleon.” It is to be published in Oxford, and will be issued thrice in the twelve months, the start to be made early in December. The motto of the publication is to be this line from one of Robert Louis Stevenson’s books “a bazaar



of dangerous and smiling chances.” The contributors to the first issue are to be Mr Oscar Wilde, Mr Max Beerbohm, Mr Lionel Johnston [sic], Lord Alfred Douglas, Mr Nicholson, and one or two others. Mr Wilde leads off with an article entitled “Phrases and Philosophies for the use of the Young.” If not calculated to improve the said “young,” “The Chameleon” will do little harm, for its sale is to be restricted to a hundred copies. (“Our London Correspondence” 5)

出版前であり、この記事の書き手が *The Chameleon* を手にしていたとは考えにくい。それにも拘わらず、イギリス退廃主義者の極端な者たちによる雑誌と考え、Wilde のタイトルを揶揄しながら、発行部数の少なさから害はないだろうと、この雑誌を退ける。唯美主義やデカダンスは、一般的に社会から受け入れられるものではなかった。そのため、それらを私的なクローゼットに押しやるのが、社会を守ることとなる。こうした論理は、同性愛に対する社会の態度と同じであった。危険を感じながらも、それを少数のものに限定することで、特異な他者として周縁化し、社会への顕在化と影響を阻むのだ。*The Chameleon* は、こうして私的、公的空間を行き来することとなる。

Wilde の名前を中心に、広告などでも寄稿者の名が挙げられているにも拘わらず、*The Chameleon* に掲載されたすべての記事や作品が署名されているわけではない。署名があるのは Wilde、Nicholson、Douglas、Bertram Lawrence のみであり、その他はアルファベット一文字が添えられているか無署名となっている。Bertram Lawrence にしても筆名であり、今では編者の Bloxam であると指摘されているものの、当時は彼がその名で広く知られていたわけでもなかった。Stuart Mason も *Bibliography of Oscar Wilde* において“the original prospectus” (17) を載せているが、実際に発刊された際の目次以上のものではなく、誰がどれを執筆しているのかについては言及していない。Smith は謎であるとしながらも、ポスター展についての記事は Hiatt が、“Judicial Wit”は Jackson が書いたであろうと述べているが(“On The

*Chameleon*”), 確固たる証拠を提示しているわけでもない。しかしながら、広告から考えると、そこに挙げられた人々が執筆者であることを疑う理由はない。当時の雑誌では、匿名での寄稿はそれほど珍しいものではなかった。例えば、Jackson は、自分の編集していた *The Artist* に掲載した詩や評論でさえ、時には匿名にしている。それも内容によって匿名かどうかを決めていたようでもない。*The Chameleon* についても、同性愛が明白な“Two Poems”は Douglas の名前が付されている一方で、“The Priest and the Acolyte”は X とイニシャルのみであった。しかも、同じく同性愛詩の“At Dawn”に対しては Bertram Lawrence という筆名を付しているといったように、内容面だけではなく、同一人物でさえも一貫性はない。こうした名前と作品との恣意的な関係は、*The Chameleon* という雑誌名が示唆する変幻自在なあり様を象徴するといえるかもしれない。いずれにしても、限定の学生雑誌とはいえ、*The Chameleon* は Wilde の名が付されたことで、より公的な場に晒されていた。

### 3. 個々の作品について

ここからそれぞれの作品について考察していきたい。巻頭に置かれたのは Wilde の“Phrases and Philosophies for the Use of the Young”であった。この警句集を *The Chameleon* に掲載した経緯について、後年 Wilde は *De Profundis* で次のように述べている。

One day you come to me and ask me, as a personal favour to you, to write something for an Oxford undergraduate magazine, about to be started by some friend of yours, whom I had never heard of in all my life, and knew nothing at all about. To please you—what did I not do always to please you? —I sent him a page of paradoxes destined originally for the *Saturday Review*. A few months later I find myself standing in the dock of the Old Bailey on account of the character of the magazine. It forms part of the Crown charge against me. I am called upon to defend your

friend's prose and your own verse. The former I cannot palliate; the latter I, loyal to the better extreme, to your youthful literature as to your youthful life, do very strongly defend, and will not hear of your being a writer of indecencies. But I go to prison, all the same, for your friend's undergraduate magazine, and "the Love that dares not tell its name." (890)

既に述べたように、Wilde は Ives の部屋で編者の Bloxam に会っており、“The Priest and the Acolyte”についても知っていた。したがって、ここでの説明は疑わしい。またこの雑誌が裁判で取り上げられ、この物語と Douglas の詩に関して尋問が行われたことは事実であるが、この雑誌のために投獄されたわけでもない。それでも、この雑誌に寄稿したことは、雑誌の宣伝効果とは裏腹に、Wilde に対して大きな損失を与えることになったことも確かである。言語的倒錯性が、彼の性的倒錯へと結びつけられたのだ。

しかしながら、これらの警句自体には、何ら同性愛の要素は見られない。Wilde が *The Saturday Review* に出すつもりだったと述べているように、これは 1894 年 11 月 17 日に同紙に掲載した“A Few Maxims for the Instruction of the Over-Educated”の続編といえるものであって、深遠な意見表明というよりは、その表層性や形式自体に価値を見出す Wilde 特有のパラドックスといえるものである。<sup>4</sup> これらは、彼の風習喜劇のダンディ達によって発せられる警句と何ら変わりはないのだ。実際、最後の“To love oneself is the beginning of a life-long romance”という一節は、後に上演されることとなる *An Ideal Husband* において、Goring 卿の発言として再利用されている。したがって、注目すべきは内容と同時に、その言語行為と、それに対する受容である。

これらはそれぞれが独立した文であって、何か纏まりをなしているのではない。それでも多くに通底する特徴の一つとして、二項対立の転倒が挙げられる。そしてそれは、社会的常識や道徳的価値の転倒と結びついている。例えば、“Wickedness is a myth invented by good people to account for the curious attractiveness of others” (1) や “Pleasure is the only thing

one should live for. Nothing ages like happiness” (2) といったものがそれだ。また美や芸術が、これらに連なる重要な要素となっていることも特徴として挙げられる。この警句集の第一文が、“The first duty in life is to be as artificial as possible” (1) というものであることは、このことを印象付ける。“One should either be a work of art, or wear a work of art” (3) など、Wilde の唯美主義的警句としてはお馴染みのものだ。*The Picture of Dorian Gray* に付した Preface での警句と同様、これらの警句は、道徳とは相容れない美の領域と常識との対立を浮かび上がらせる。しかも言語的な倒錯がそれを遂行するのであれば、美的領域自体の倒錯性はますます強まる。したがって、これらの警句が真面目に取り上げられるときには、道徳的に異質で危険なものと認識される可能性が生じる。実際、裁判では、この警句の幾つかも尋問の対象となった。*The Times* はその時の様子を次のように伝えている。

Being questioned as to the morality of some of his expressions in the *Chameleon* article, Mr. Wilde said there was no such thing as morality or immorality in thought, but there was such a thing as immoral emotion. The realization of one's self was the prime aim in life, and to do so through pleasure was finer than through pain. On that point he was on the side of the Greeks. . . . There was no such thing as a moral or an immoral book, to his mind. Books are either well or badly written. Well written, they produced a sense of beauty—the highest sense of which a human being could be capable—and badly written, a sense of disgust. No work of art ever put forward views, for views belonged to people who were not artists. (“Central Criminal Court, April 3” 7)

後半の記述は *The Picture of Dorian Gray* の警句との関係であるが、“Phrases and Philosophies”と混ざり合い、すべての警句が Wilde の倒錯的思想と態度を表すものとして一般化される。Wilde という名のもとに収斂する一連の警句は、たとえば言葉遊びとしての面白さや表層的な調子に彩られようとも、美と倒



錯へと結びつくのだ。そしてそれは、明示的な同性愛作品を含んだ雑誌と共存するとき、お互いが補強し合いながら、性的倒錯の空間を際立たせる。The Saturday Review に独立して掲載されたり、ダンディが風習喜劇という文脈で発するものとは異なる意味作用がここに生じるのだ。Jonathan Dollimore は、世間が Wilde に恐怖を感じたのは、“a perceived connection between his [Wilde’s] aesthetic transgression and sexual transgression” (67) ゆえだと指摘しているが、自然からの逸脱として考えられたソドミーが、Wilde の逸脱的思想や態度と結びつけられたことはそれほど驚くに値しない。問題なのは、その社会的地位と挑発性だ。上流の出身ではないにしろ、Wilde は社交界の寵児であり、当意即妙の会話で世間を魅了した。他方で、美と退廃を称賛しながら、道徳を超えた領域を唱道することで、その人と言葉が謎めいたシニフィアンとして機能した。この点で、Wilde の“Phrases and Philosophies”は、同性愛作品を含む *The Chameleon* をより問題のある雑誌へと導いたといえる。

Wilde の警句の後には、Nicholson による“The Shadow of the End”と題する物語が配されている。Nicholson は Douglas や Symonds だけではなく、Carpenter, Frederick William Rolf, White ら、多くの同性愛作家と親交があり、Kaylor によると (102)、Ives の *The Order of Chaeronea* のメンバーでもあった。また彼は同性愛詩集である *Love in Earnest: Sonnets, Ballades, and Lyrics* を 1892 年に出版している。

Smith が“On *The Chameleon*”において、Simeon Solomon の *Visions of Love Revealed in Sleep* に比する人もいるかもしれないと指摘するこの物語は、Solomon の作品同様、夢での出来事からなる。自分と彼の身体、魂、精神を結びつけるのは愛だけと述べる語り手は、“House of Slumber” (4) に彼だけが入ることで一人取り残されてしまう。彼を失ったのではないかと嘆く語り手に対して、突然現れたある人 (“One”) から彼とは朝に会えるから耐えるように進言されるが、失望は変わらない。ここまでの物語が詩で再描写され、第一部は終わる。第二部では、彼

を探す夢の中、彼を愛する 4 人の人物が現れ、一緒に彼を求めて彷徨う。語り手は 4 人に先んじてある人 (“One”) に会えるが、“Homewards went he without fear as without pain” (7) と、恋人の死が告げられる。彼の顔を再び見ることができないと語り手を含めた 5 人は涙を流すものの、それが最良であったと述べられる。そして、再びここまでの状況が詩で描かれて終わる。このように、物語は、夢の中の出来事として幻想的に語られる。何か教訓めいたものがあるわけでもない。エピグラフには、フランス語で「ヨブ記」の 33 章 14-17 節が引用されているが、物語を解く鍵を提供するというよりは、むしろ謎を深めるだけである。同性愛的行為が明確に示されるわけでもない。それでも、私と彼の関係が同性愛であることは、恋人として語られていることから明らかである。詩の中でその恋人は、“my Prince” (5) とも称される。そうした関係が、美的な背景に包まれて描写される点が、この物語の特徴である。死を連想させる暗さと芸術的な美を交差させながら、謎めいた雰囲気の下で同性愛を提示するのだ。この点で、美の賛歌と退廃が手を取り合う Wilde の警句とも調和する。もちろん後者には同性愛の要素はないものの、美を中心に据える *The Chameleon* の特異性がここで強められるのだ。

こうした美への傾倒は、Nicholson の夢物語に続く評論、“A New Art: A Note on the Poster”にも窺うことができる。C と署名されたこの評論には、同性愛の要素は一切ない。それでも、*The Chameleon* という雑誌全体を考えるためには、見逃せない部分がある。タイトルが示唆する通り、これは 1894 年 10 月 25 日に開幕したポスター展についての評論である。展示された 204 の作品の中心をなしたのは、フランスの画家によるものであった。“In England the art of the poster is in its infancy, in France it is at its zenith” (9) と述べながら、この評論は幾つかの作品を挙げてこのポスター展を称賛する。その際、“to healthy-minded people there is not an ounce of offence in the whole exhibition: there is, on the other hand, an immense amount of delight, and not a little merriment” (8) と、芸術の快楽性と共に、そうした芸術感覚を不

健全とみなす社会に皮肉を込める。新聞各紙でも、この展示は好意的に評されていた。例えば *Weekly Dispatch* は“Art in Advertising”と題する記事で、“These posters are not only examples of artistic originality, beauty, and design, but actual records of the daily life and interests of the age. The exhibition is mainly French, and to the ordinary Britisher it is quite a revelation of the artistic taste, the exquisite humour, and the business tact of our sprightly neighbours across ‘the streak’” (7) と、フランスの芸術を称えている。このポスター展では、イギリスの画家のポスターも展示されたが、数としては圧倒的にフランスの画家のものが多かった。その中、この評論が、Dudley Hardy と Maurice Greiffenhagen と共に Aubrey Beardsley の名も挙げていることは、*The Chameleon* とデカダンスの関係を考えると注目に値する。1894年2月には、Wilde の *Salome* の英語版が、Beardsley の挿絵入りで出版されていた。Wilde は自分の作品と挿絵との乖離に不満を抱いていたものの、Wilde と若き画家とが退廃的な側面で連想されたことに疑いはない。明白に逸脱的ではないものの、この点でポスター展に関するこの評論は、美と退廃を唱道するこの雑誌の方向性を示しているのだ。

続いて掲載されているのは、E と署名された“On the Morality of Comic Opera”と題する評論である。これはコミック・オペラが“a most powerful moral agent” (11) であることを、幾つかの作品を取り上げながら主張するものである。この点で、先の評論とは趣が大きく異なる。唯美主義の観点から考えると、道徳を芸術作品の中に見出すという発想自体が相応しくない。むしろそれらの領域が異なることを、Wilde は繰り返し主張した。しかしながら、この評論で芸術の道徳性が述べられるとき、そこに皮肉が込められているわけでもなく、一般的な文芸批評のように道徳性が語られる。そのため、同性愛はもとより、美やデカダンスの要素もない。*The Chameleon* はしばしば同性愛雑誌と呼ばれるが、このことは、すべてが同性愛でも、首尾一貫した主張がなされるわけでもないことを表している。同時に、コミック・オペラという軽妙で快樂的な芸術が擁護されている

点では、美を中心に据えるこの雑誌と調和する。*The Chameleon* 同様、同性愛雑誌と呼ばれる *The Artist* も、同性愛だけを扱うことはなかった。それは同性愛を隠すためというよりは、同性愛が広く芸術の場で語られる傾向にあったことを示している。いずれにしても、この評論は、後に触れる同性愛要素の一切ない幾つかの記事と共に、*The Chameleon* の雑多性を物語る。その主張も含めて、この雑誌はそのタイトルが示唆する通り、変幻自在なあり様を遂行するのだ。

これらの二つの評論に続いては、“Les Décadents”と題する詩が掲載されているが、これは *The Chameleon* の退廃的側面を強調するのに十分である。無署名のこの短い詩は、冒頭から“*But to old sins in their decay, / And to old vices under ban, / Pour the old wine and lift the lay*” (16) と、背徳性を賛美する。さらに、続く第二連では“*A new Antinoüs to kiss / Shall brighten these bleak skies of grey*” (16) と、Hadrian に寵愛を受けた青年 Antinoüs に言及する。また“*the boy flute-players*” (16) という快活で美しい少年に、同性愛が仄めかされる。この詩は“envoy”で締められるが、そこでも“old sins” (17) に対して献酒が求められる。“*A bumper of Falernian!*”という一節が、すべての連の最後で繰り返されるように、ワインを契機として、逸脱的な快樂が求められるのだ。確かに、この詩で語られる“sins”や“vices”の内容は明らかではない。それでも、Antinoüs やフルートを吹く少年といった記号と並ぶことで、それらは同性愛を連想させる。リフレインで用いられる Falernian wine は古代ローマのワインであり、詩人たちによっても称えられていた。ここから、ワインを注ぐ“catamite”は容易に結びつく。例えば Juventius という若者への恋愛詩も残している Gaius Valerius Catullus は、“*Boy, serve of vintage Falernian / Pour me stronger cups*” (27) と書いている。“Les Décadents”で明示される同性愛は、“Antinoüs to kiss”のみである。しかしながら、この詩は、背徳と快樂を求める身振りの中に、幾重にも同性愛要素を潜ませるのだ。

同性愛を含んだ物語である“The Shadow of the End”の次には、それを含まない評論が続いたように、

“Les Décadents”の後にも、“James Anthony Froude”と“Of ‘The Vagabonds,’ by Margaret L. Woods”という同性愛とは無関係の二つの評論が配されている。前者はOxford大学の現代歴史教授であったFroudeの足跡を称えながら、その死を追悼するものであるが、“a writer of such style and grace”(17)と述べられるように、単なる事実の記録者という観点ではなく、文学者として考えられている点では、*The Chameleon*の調子と一致している。このことは、終盤でWalter Paterの名が挙げられ、二人が類似的に述べられている部分にも表れている。FroudeとPaterは両者が持つ美的文体を通して、唯美主義の側面へと繋がるのだ。この死亡記事から“Of ‘The Vagabonds’”への流れも、不自然なものではない。この評論は、19世紀の“the advent of Woman in literature”(21)を認めながら、タイトル通りWoodsの小説を称えるものである。Gと署名する著者は、WoodsがJane Austenにも比するとしながら、*The Vagabonds*の美的描写について解説する。そして、内容的には醜いサーカスの生活でありながら、それを美しくする筆をWoodsは持つと称賛する。Wildeは、“The Decay of Lying”において“As a method, realism is a complete failure”(102)と述べ、唯美主義の立場からリアリズムを否定しているが、この評論もWoodsのリアリズムを醜悪な事実の蓄積によるものではないと、唯美主義の観点から捉える。“genius alone can make ugliness beautiful by treatment”(24)という主張を通して、その美的手腕を強調するのだ。

ここまで同性愛を含んでいたのはNicholsonによる物語と無署名の“Les Décadents”であり、それらが美と関係する警句や評論などに取り囲まれていた。したがって、いわゆる文学作品は同性愛を中心に据えているのであるが、Woodsの小説についての文芸批評に続くDouglasによる二つの詩も、その例に違わず、同性愛文学となっている。一つ目は“In Praise of Shame”と題された詩であり、1894年2月の日付が付されている。内容としては、自分のベッドの傍らにやってきた女性によって見せられたビジョンにおいて、炎から形作られたものが“I am Shame / That walks with Love, I am most wise to turn / Cold lips and

limbs to fire; therefore discern / And see my loveliness, and praise my name”(25)と叫ぶ。その後、フルートの音色や快活な笑いを伴って、光り輝く服を着た情熱が夜通し過ぎ去る。そして夜が明けたときに、“Of all sweet passions Shame is loveliest”(25)と語り手が肯定して締めくくられる。続く詩でも使われる“shame”という語は、“shame”から“pride”へとというゲイ解放運動の言葉を知る今日の人々にとっては容易に同性愛と結びつくが、当時はそこまで同性愛を喚起するものではなかった。それでも、Marc André Raffalovichが1885年に出版した詩集*Tuberose and Meadowsweet*で初めてこの語に同性愛を含意し、その後しばしば繰り返されたとSmithが指摘しているように(*Love in Earnest* 31)、同性愛者たちには共有された記号であった。Raffalovichは、“Piers Gaveston”と題された詩で、擬人化された“Sorrow”を人々は“Shame”と呼ぶとしながら、この語に同性愛を仄めかしている。彼は、DouglasやWildeだけではなく、PaterやSolomonなどとも交流があり、Wildeの恋人であったJohn Henry Grayとも生涯、親密な関係を持った。Wildeは*Pall Mall Gazette*に匿名で掲載した“A Bevy of Poets”と題する評論でこの詩集を取り上げ、“unhealthy”で“the heavy odours of the hothouse”(5)をもたらすと評してもいる。これらのコミュニティによる“shame”という語を取り巻く共有が、Douglasの詩に結晶化されたと考えられるのだ。Douglasは*The Spirit Lamp*にも“Sicilian Love Song”のような明白な同性愛詩を掲載していたが、この詩でも行為こそ描かないものの、快樂で彩りながら同性愛的欲望を記述する。夢を背景にししながら、背徳的な欲望を幻想的に提示するのだ。

続く“Two Loves”も同様に、夢を背景に同性愛が暗示的に描かれる。この詩には1892年9月の日付が付されているので、これが真実であるならば、こちらが先に書かれたことになる。それにも拘らず、こちらが後に掲載されていることによって、“In Praise of Shame”はこの詩の序としての機能を果たすこととなる。そこで称えられた“shame”がこの詩で具現化されるのだ。

“Two Loves”は連によって分けられてはいないも



の、大きく二つの部分からなる。前半は、様々な花が咲く場所が、美的に長々と描き出される。その後、語り手が“a place so strange, so sweet, so fair” (26)を見つめていると裸の若者がやってくる。その描写は、美的で官能的である。

one hand he raised

To shield him from the sun, his wind-tossed hair  
Was twined with flowers, and in his hand he bore  
A purple bunch of bursting grapes, his eyes  
Were clear as crystal, naked all was he,  
White as the snow on pathless mountains frore,  
Red were his lips as red wine-spilth that dyes  
A marble floor, his brow chalcedony. (27)

髪、目、唇、額といった部分に焦点が当てられながら、色に関する比喩と共にこの美しい謎めいた若者が詳述される。手に持つ葡萄も官能的であり、裸体がそれを引き立てる。それを見る語り手の視座に読者を誘いながら、この詩は、エロティックな欲望を提示する。そしてこの若者が近づき、私の手を取りキスをするとき、美に包まれた若者との同性愛的関係は頂点に達する。

この若者が“shadows of the world / And images of life” (27)を見せるところから、第二の部分が始まる。終わりなきベジェントに続いて、庭で二人の人物が歩いているのを語り手は見つける。一人は楽しそうに、“pretty maids”と“joyous love of comely girl and boy” (27)を歌うとされる。すべてが快活であり、明るさに包まれている。他方、もう一人の人物は悲しげのため息をついている。容姿も対照的であり、やつれて白く、息は曲がった炎のようである。心を打たれた語り手が、悲しみの理由を聞き、名前を問うと、“My name is Love”と答える。しかしながら、第一の人物がすかさずそれを否定して次のように述べる。

‘He lieth, for his name is Shame,  
But I am Love, and I was wont to be  
Alone in this fair garden, till he came  
Unasked by night; I am true Love, I fill  
The hearts of boy and girl with mutual flame. (28)

このように言われたもう一方が、ため息をつきなが

ら“‘I am the love that dare not speak its name’”という有名な一節を述べてこの詩は終わる。

ここでは擬人化された“Love”と“Shame”とが対比されている。一方は陽であり、すべてが明るさで彩られている。もう一方は夜にやってきたと言われるように陰であり、憂鬱さに取り囲まれている。したがって、前者が真の愛であり、少年少女の心を炎で満たすのであれば、後者は自ずとそうではないものとなる。この詩自体はそれが何であるのかを明示せずに終える。しかしながら、詩の前半で登場し、この影を見せることとなる若者とのキスとの繋がりを考えれば、当然、同性愛が想起される。しかも、この詩は、単に二つの愛を示すだけではない。“In Praise of Shame”での称賛を序とするこの詩は、“Shame”である同性愛を肯定するのだ。実際、語り手も“Shame”に心を動かされているし、描写に暗さは伴うものの、“his cheeks were wan and white / Like pallid lilies, and his lips were red / Like poppies” (27-28)といったように、“Shame”は官能的な美を携えている。一見すると否定的な印象を与えるものの、全体を通して唯美主義やデカダンスを称える *The Chameleon* においては、“Shame”はその背徳性ゆえに賛美されるべきものへと反転するのだ。

裁判において、“the love that dare not speak its name”が何であるのか Wilde は問われた。<sup>5</sup> 自分の詩ではないにも拘わらずこれが持ち出されたのは、彼の性的逸脱とこの詩を結びつけるためであった。そのため、尋問する側にとっては、その答えは明白であった。この詩が単独で別の雑誌に出版されていれば、裁判で取り上げられるほどの問題作とはみなされなかったかもしれない。しかしながら、彼も警句を掲載していたという事実と共に、*The Chameleon* という雑誌全体のコンテクストが、そうはさせなかったのだ。

Douglas の二つの詩に続いて掲載された“The Priest and the Acolyte”は、まさにこの雑誌を特徴づける明白な同性愛物語である。今では編者の Bloxam の作品であることが分かっており、また Mason も当時 Oxford では“more or less an open secret” (“Introductory Protest”13)であったと指摘している

が、この物語には X としか署名されていなかった。そのため、この物語の新しい版を出版する際に Mason は“Introductory Protest”を付して、Wilde の作品ではないと反論しているほどである。自分の作品ではないにも拘らず、この物語もワイルド裁判において取り上げられた。Douglas の詩の擁護とは異なり、Wilde はこの物語について問われると、出版までこの物語を知らなかったと述べ、“I thought it bad and indecent, and I strongly disapproved of it” (Hyde 104) と返答した。しかしながら、*The Chameleon* が出版された際に Ada Levenson に宛てた手紙では、彼は次のように述べている。

Dear Sphinx, Your aphorisms must appear in the second number of the *Chameleon*: they are exquisite. ‘The Priest and the Acolyte’ is not by Dorian: though you were right in discerning by internal evidence that the author has a profile. He is an undergraduate of strange beauty. The story is, to my ears, too direct: there is no nuance: it profanes a little by revelation: God and other artists are always a little obscure. Still, it has interesting qualities, and is at moments poisonous: which is something. (Holland 625)

自分とは無関係であることを強調するためにも、Wilde は裁判では、より否定的にこの作品を評したといえるが、いずれにしても、ここで彼が述べるように、この物語の同性愛描写は直接的で、明白であった。

物語は主人公の司祭である Ronald Heatherington とその侍者となった 14 歳の美しい少年 Wilfred の関係を描き出す。少年時代から抱いていた“terrible passions” (32) を抑えることに奮闘してきた 28 歳の Ronald は、聖職受任から懸命に働いた後、村の小さな教会の牧師となる。その数日後、村の老夫婦を訪れた際に、孫の Wilfred を侍者にして欲しいと頼まれ引き受ける。最初は気にも留めていなかったのであるが、懺悔を聞いた際に Wilfred の“wonderful loveliness” (33) に気づく。Ronald は、自分が避けてきた欲望と葛藤するが、Wilfred が夜更けにやってきて、愛の告白を受けるに至り、彼を受け入れてしま

う。決して卑猥ではないものの、二人の身体的接触は明白に描かれる。

For nearly an hour the boy nestled there in his arms, pressing his soft cheek against his; then the priest told him he must go. For one last kiss their lips met, and then the small white-clad figure slipped through the window. . . . When they met in the vestry next morning, the lad raised his beautiful flower-like face, and the priest, gently putting his arms round him, kissed him tenderly on the lips. (35)

この後も二人は毎晩、逢瀬を重ねていくが、やがて世間は二人の關係に疑いを持つようになる。そしてついに、二人が戯れる場に教区牧師が踏み込み、關係が露呈してしまう。しかしながら、これによって Ronald は後悔の念を抱くことはない。“shame” や “sin” といった言葉での非難に対して、自分たちの感情は“perfect love” (40) であると彼は反論するのだ。激しい議論を経て教区牧師が去った後、Wildred と再会した Ronald は、この世で別れるよりも二人で死ぬことを選び、祭壇へと向かう。そして毒を入れた聖餐杯を共に飲み、キスをしながら二人は死ぬ。最後は、翌朝の二人の死体の様子と共に、第二部の前半でも引用されていた「マタイによる福音書」の 21 章 44 節からの引用で物語は終わる。

19 世紀後半の同性愛の置かれた状況を考えれば、この物語が非難の対象となったことは驚くに値しない。最終的には二人は死を遂げるものの、この物語では同性愛が完全に擁護されている。Ronald は、幼少期から他の人とは異なっていたこと、罪に惹かれていたこと、何よりも美しい罪があると考えること、美と愛を求めていたこと、“fits of passionate affection” (41) の犠牲者であったこと、聖職に付いたのもキリスト教の“the aesthetic beauty” (41) に惹かれたためであったこと、そして祈りにおいても“pleasure, excitement, almost the fierce delight of sin” (42) を見出すだけであることを、自分の人生を回顧しながら語る。そして、因習に真っ向から反抗して次のように述べる。

“Ah, what a cursed thing convention is! I have



committed no moral offence in this matter; in the sight of God my soul is blameless; but to you and to the world I am guilty of an abominable crime—abominable, because it is a sin against convention, forsooth. I met this boy: I loved him as I have never loved any one or anything before. . . . How dare the world presume to judge us? What is convention to us? . . . In God's eyes we are martyrs, and we shall not shrink even from death in this struggle against the idolatrous worship of convention.” (43–44)

キリスト教において、古くからソドミーは、自然に反する行為として規定されてきた。それに対して19世紀後半にヨーロッパ大陸を中心に誕生した性科学では、生まれながらの性質として同性愛を捉える見方も現れた。同性愛解放運動のバイオニアと称される Karl Heinrich Ulrichs も、生来の性質として同性愛は本人にとっては自然なものであると主張し、罪として同性間の欲望を処罰することに反対した。Ronald も、子供のころからの性向を語ることによって、本人にとっては自然な欲望であることを強調する。彼は結婚をすべきだったという助言に対しても、“my nature” (43) からすると、結婚は罪であったろうと反論する。このように同性愛的欲望を自然なものみなすがゆえに、因習を批判し、自らの欲望を擁護するのだ。

Ronald の因習批判に先立つ Part II の冒頭では、語り手によっても因習についての記述がなされる。ここでは、“convention is the stone that has become the head of the corner in the jerry-built temple of our superficial, self-assertive civilisation” (36–37) と否定的に述べられた後、聖書からの引用がなされる。それに続いて、理解しないものに出会うと、世間はそこに“the presence of some secret shame” (37) を考え、下劣な動機を与えると、その偏狭性を批判する。このように、同性愛と因習との対立を示しながら、物語全体として後者を否定することとなる。

この因習への抵抗は、同性愛の自然性から、キリスト教を媒介とした美による抵抗となって結実する。ソドミーの語源が旧約聖書のソドムとゴモラの逸話

から来ているように、ソドミーへの忌避や禁止はキリスト教と深く関係していた。そうした状況を前に、この物語はキリスト教を美的に捉えながら、そこに同性愛を結びつける。二人の自殺もキリスト教の儀式を通して執り行われ、二人の死体は祭壇の横に美しく横たわる。同性愛を“perfect love”と呼ぶとき、それはキリスト教の愛と重なりあうのだ。Ulrichs は “Are we not all children of one Father? Did not a God create us, too? We Urnings are also qualified to take part in worldly happiness. We, too, are called to taste the joy of love” (203) と述べながら、キリスト教と同性愛の間にまったく対立はないと主張した。この物語でも、両者は美で結びつき、昇華されていく。裁判において、“The Priest and the Acolyte”を冒瀆的と思うかどうか Wilde は問われた。また、毒を Wilfred に与えるときに聖餐式の言葉を使っていることについても、冒瀆的と考えるかどうかとも問われた (Hyde 107)。当時のキリスト教と同性愛の関係を考えれば、それは当然の見方であった。Wilde は、冒瀆的というのは自分の言葉ではないとはぐらかしたが、この物語は、まさにそうした因習的な認識に抵抗する。それは、完全な愛である同性愛とその美を冒瀆とみなすこと自体を批判しながら、偏狭な因習に挑むのだ。

Douglas の二つの明白な同性愛詩と Bloxam による挑発的な同性愛物語に続いて、“Love in Oxford” という匿名の同性愛詩が掲載されている。幻想的な背景の中で、私の愛は彼へと向かう。それは魂が欲するものである。二連では美的な状況描写に包まれながら、身体的欲望が明白に示される。

I long for the lips I kiss'd,  
And the eyes that were brave and bright;  
I long for the touch of his hand,  
And the sound of the voice I knew. (48)

唇、目、手、声と、感覚的な要素と身体的接触への欲望が語られた後には、この彼がやって来る。その彼の魂も燃えており、美しい声で私に黄金の歌を歌い、私から“fear and shame” (48) を取り除く。この“shame”は、当然のことながら Douglas の詩での同性愛としての“shame”と呼応する。恐れる必要がな

くなった語り手は至福に包まれ、愛の深さが肯定されてこの詩は終わる。同性愛詩として、タイトルの“Love in Oxford”は象徴的である。既に指摘した通り、当時 Oxford 大学は、ヘレニズム文化への傾倒から、“Greek love”称賛の中心地となっていた。Gregory Woods は、そこでは“impressionable youths sat at the feet of men like Walter Pater or Benjamin Jowett, or solitary garrets where the same youths read the classics in Greek and Latin and where they made lists of mythic and historical figures who felt the same as they did on catching sight of a muscular physique” (3) と論じる。この詩は *The Chameleon* が Oxford の学生雑誌であるという事実を浮き彫りにする。しかも、Douglas の詩とは異なり、この詩では恥や恐れといった否定的な要素は取り払われ、語り手は自由に彼を愛する。ほとんど論じられることのない詩であるものの、美的に描かれる純粋な同性愛の賛歌として *The Chameleon* の中心をなす詩ともいえるのだ。

3つの同性愛作品の後には、“Judicial Wit of Recent Times”と“On the Appreciation of Trifles”という同性愛の要素が皆無のエッセイが配されている。前者については、芸術とも文学とも無関係という点では、ある意味でこの雑誌ではもっとも異色のものである。K と署名されたこの記事は、裁判所における幾つかの逸話を紹介して、その諧謔性を記す。それゆえ、調子は軽く、社会批判もない。“On the Appreciation of Trifles”はそのタイトルが示唆する通り、些細なものによる生活の美化を、軽妙な調子で唱道するものであり、Wilde の *The Importance of Being Earnest* や *Intentions* での主張や語り口を思い起こさせる。そして実際、文中では Wilde の警句のような言葉が散見される。例えば、“The true secret of life . . . is this: to understand that there is in truth no secret at all” (52) といった具合だ。美を理解しない俗物として中流階級を否定する態度も、Wilde の唯美主義を彷彿とさせる。このエッセイでは石鹸や香水にかけるちょっとした贅沢と経済とが対比され、後者が“vice and the evil practices” (55) として批判されるが、この発想は身近なものや必需品の美化という人生の芸術化と重なる。また“A New Art: A Note on the Poster”で取り

上げられたポスター展に言及し、Beardsley の名を挙げながら、俗物たちが憤るとして、その美を称賛する点では、退廃的な美の擁護もなされる。“self-indulgence” (56)、“artistic pleasure” (57)、“the aesthetic sense” (57) といった語を使いながら、美と快楽を唱道するこのエッセイは、*The Chameleon* の唯美主義と完全に調和する。それだけではない。美しい制服の称賛において、微かに同性愛も仄めかされている。1889年に起きたいわゆる Cleveland Street scandal の発端となったのは、電報配達少年が男娼として働いていたことが判明したことであった。このことは、こうした少年と同性愛のサブカルチャーとの密接な関係を示唆しているが、このエッセイが“the graceful, neatly uniformed figures of those that bear our messages and our telegrams” (58) と述べるとき、その含意を意識せずにはいられない。もちろん表面的には相応しい制服を着た“officials and private servants” (58) の美を称えているに過ぎない。しかしながら、*The Chameleon* における美と同性愛の結びつきを踏まえるならば、俗物と対比される制服の美の背景に、異性愛に与さない同性愛を見出すことは難しくない。

これまで見てきた通り、この雑誌に掲載された詩はすべて同性愛の要素を含んでいたが、最後に配された“At Dawn”と題する詩でもそれは変わらない。それまで見るができなかった彼を、夜明けとともに見出すというこの短い詩は、“I saw that love was a beauteous thing, / For I clasped to my breast my curl-crowned king, / My sweet boy-king” (59) という詩句で締められる。この部分が示すように、ここでの愛は美しき少年への愛であるが、この詩が Bloxam の作であることを考えれば合点がいく。“The Priest and the Acolyte”は、まさに年長者が年少者を導く少年愛の物語であった。この詩で少年を胸に抱きしめる語り手の姿は、Wilfred を抱きしめる Ronald と重なり合う。それは美に包まれた至福の時を伝える。こうして同性愛は因習から解き放たれるのだ。“The Dawn”は、そのタイトル通り、同性愛が昇華された、新たな夜明けを予期する。この点で、*The Chameleon* の最後を飾るのに相応しい詩といえるだろう。

#### 4. おわりに—*The Chameleon* の位置

年に3冊の発行を予定していたにも拘らず、*The Chameleon* は1冊のみで廃刊となった。その要因として、Jerome K. Jeromeによる*To-Day*での批判が指摘されているが、その糾弾は注目に値する。

As far as I can judge, it [*The Chameleon*] can be purchased by anyone who likes to pay the subscription. If I am wrong—if it is a private publication, intended only to circulate among a limited and known *clientèle*—there is an end of the matter. A hundred gentlemen or so have as much right to circulate indecency among themselves, by means of the printing press, as they have to tell each other dirty stories in the club smoking-room. Each to his taste. But if “*The Chameleon*” is issued broadcast, and immature young, or foolish New Young Woman, can obtain it, then it is certainly a case for the police. The publication appears to be nothing more nor less than an advocacy for indulgence in the cravings of an unnatural disease. (241)

Jeromeは、*The Chameleon*が同性間の“unnatural cravings”(241)を扱う雑誌だと明確に理解している。そうした情熱は、人類への冒瀆であるとも言う。しかしながら、焦点はむしろ、こうした雑誌の影響力にある。実際、この引用にある通り、彼はこれが私的に流通するだけであれば問題ないとさえ述べる。当時、特にパブリック・スクールにおける生徒間の性的行為は、悪徳として認識されていた。それはソドミーという不自然な行為であり、悪い影響によって引き起こされるものと考えられていた。Jeromeが、“an exceptionally strong nature”(241)を持っているなければ、この種の雑誌を手にした若者を永遠に墮落させると指摘するのは、まさにこうした考えに基づいている。このような論理を持っていたがゆえに、彼にとって*The Chameleon*は、“evil”以外の目的を持たない“garbage and offal”(241)であったのだ。廃刊になったことを伝える翌週の*To-Day*では、“it was necessary to speak publicly, but as a general rule more

good could be done by the direct influence of parents, friends, and guardians”(275)という読者の手紙が紹介されているが、これも悪影響によって引き起こされるソドミーという論理から来ている。この読者が100部限定の*The Chameleon*を手にしたとは思えないが、Jeromeの言葉から有害な雑誌と認識したことは疑いが無い。この批判から4か月後にJeromeは、*The Chameleon*を糾弾した後に、こうした事柄には触れるべきではなく、悪を宣伝したとして非難する多くの手紙を受け取ったと述べているが(305)、ここには、同性愛に対する沈黙と暴露という当時のイギリスが抱いた二つの相反する態度を見ることができ

る。同性愛に関する限り、私的空間と公的空間の境界は、1885年の刑法改正によって明白に取り払われた。これによって、私的な場における“any act of gross indecency”が取り締まりの対象となったのである。しかしながら、これ以前でも、私的空間は決して安全な場所ではなかった。ソドミーはどのような場であろうとも、常に非難の対象であるだけでなく、罪であった。だからこそ、同性愛はサブカルチャーとして社会に潜みながら存在した。しかしながら同時に、そのような危険を顧みず、Douglas編集時の*The Spirit Lamp*やJackson編集時の*The Artist*では、芸術を中心として、文学作品や評論、時事エッセイ等において同性愛が陰に陽に表された。それは雑多な記事に紛れつつ、それでいて確かに存在した。作者の自己検閲もあれば、編者による選別も働いたことは間違いがない。この点で、当時の同性愛に関する作品は社会との緊張関係を持ちながら、絶えず交渉の場に晒されていた。例えば、Wildeの*The Picture of Dorian Gray*は、Basilの明白な同性愛的告白がある一方で、Dorianの罪は決して明かされず、名もなきシニフィアンとして小説内に留まった。Wildeが“The Priest and the Acolyte”について、“too direct”であり“there is no nuance”と述べた手紙を引用したが、当時の同性愛には、明示と暗示の境界線の模索が少なからず付随したのだ。ワイルド裁判が伝えるように、秘密が逸脱として暴かれるとき、それは破滅を意味した。*The Chameleon*は、この点で社会の許容

範囲を超えていた。発行部数は限られていたものの、Wilde の名を挙げて宣伝し、公に流通しただけではなく、同性愛を美的な装いを纏わせながらあまりに明示的に記述し、擁護したのだ。The Chameleon には、14 の記事が掲載されているが、5 つの詩はすべて同性愛の要素を含んでいた。また Nicholson と Bloxam による 2 つの散文どちらもが明白な同性愛作品であった。さらに Wilde の倒錯的な警句や、ポスター展についての評論、些細な事柄の重要性を説く唯美主義的エッセイのどれもが、美と同性愛の関係を補強する効果を持っていた。したがって、当時としては、これほど同性愛雑誌の名に相応しいものは類をみない。しかしながら、社会からすれば、それは許されざる逸脱であった。1冊で廃刊になったことは、このことを物語る。

限定の雑誌として The Chameleon は、そこまで大きな社会改革を意図していなかったと考えられる。それでも Bloxam の物語は、社会への憤怒を刻印した。それは当時の同性愛に対する抑圧からすれば、自然な発露であったといえる。そして雑誌全体としても、同性愛を審美化しながら、抑圧的な因習を超えようとした。それは雑誌という媒体であるがゆえに、社会との交渉の場であった。それは快樂的な擬態によって、私的空間と公的空間を行き来したのだ。

#### 注

1. The Spirit Lamp では Vol.4. No.1. が最も同性愛作品の割合が多く、半数近くに上る。
2. 彼が Wilde と親交があったことは確かであり、手紙のやり取りも回想しているが、二人の間の書簡は残っていない。また、Wilde の書簡中でも彼の名は挙げられていない。
3. Pisanus Fraxi [Henry Spencer Ashbee] によると (194, 402)、これらはどちらも 50 部限定であった (但し、前者を 150 部かもしれないと付している)。同じく同性愛ポルノ小説として広く知られている Teleny or The Reverse of the Medal は 200 部限定であった (Mendes 252)。
4. “A Few Maxims for the Instruction of the Over-Educated” は匿名で掲載されていたこともあり、Stuart Mason の Bibliography of Oscar Wilde でも言及がないが、今日では Wilde の作とされている。
5. Douglas の詩の “shame” は “a quickened sense of modesty” だと答えた後、Wilde は “‘The Love that dare not speak its name’ in this century is such a great affection of an elder for a younger man as there was between David and Jonathan, such as Plato made the very basis of his philosophy, and such as you find in the sonnets of Michelangelo and Shakespeare. It is that deep, spiritual affection that is as pure as it is perfect” (Hyde 200-01) と述べ、同性愛を擁護した。

#### 参考文献

- “Art in Advertising. Interesting Exhibition at the Aquarium.”  
Weekly Dispatch 28 Oct. 1894: 7.
- Brake, Laurel. *Print in Transition 1850-1910: Studies in Media and Book History*. London: Palgrave Macmillan, 2001.
- Catullus. *The Poems of Catullus*. Trans. Daisy Dunn. London: William Collins, 2016.
- “Central Criminal Court, April 3.” *The Times* 4 Apr. 1895: 7.
- Chamberlin, J. E. Rev. of *The Chameleon, A Facsimile Edition*.  
*Victorian Periodicals Review* 14.2 (1981): 81-84.
- The Chameleon: A Facsimile Edition*. Ed. G. Krishnamurti.  
London: The Eighteen Nineties Society, 1978.
- Dollimore, Jonathan. *Sexual Dissidence: Augustine to Wilde, Freud to Foucault*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Eglinton, J. Z. “The Later Career of John Francis Bloxam.”  
*International Journal of Greek Love* 1.2 (1966): 40-42.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Penguin Books, 1988.
- Fraxi, Pisanus [Henry Spencer Ashbee]. *Catena Librorum Tacendorum: Notes Bio-Biblio-Iconographical and Critical on Curious and Uncommon Books*. London: Privately Printed, 1885.
- Holland, Merlin, and Rupert Hart-Davis, eds. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. New York: Henry Hold and Company, 2000.
- Hyde, Montgomery H. *The Trials of Oscar Wilde*. NY: Dover Publications, 1962.
- Jerome, Jerome K. “To-Day.” *To-Day* 29 Dec. 1894: 241-44.
- . “To-Day.” *To-Day* 5 Jan. 1895: 273-75.
- . “To-Day.” *To-Day* 13 Apr. 1895: 305-08.
- Kaylor, Michael Matthew, ed. *Lad's Love: An Anthology of Uranian Poetry and Prose*. 2 vols. Kansas City: Valancourt Books, 2010.
- Mason, Stuart. *Bibliography of Oscar Wilde*. London: T. Werner



- Laurie, 1914.
- . “Introductory Protest.” *The Priest and the Acolyte*. London: Lotus Press, 1907. 5–25.
- Mendes, Peter. *Clandestine Erotic Fiction in English 1800-1930*. London and NY: Routledge, 2016.
- “Notes and News.” *The Academy* 8 Dec. 1894: 472–73.
- “Number One Now Ready.” Advertisement. *The Athenaeum* 8 Dec. 1894: 805.
- “Our London Correspondence.” *The Glasgow Herald* 30 Dec. 1894: 5.
- “Oxford Jottings (From Our Own Correspondent).” *The Globe* 3 Dec. 1894: 6.
- Raffalovich, Marc André. *Tuberose and Meadowsweet*. London: David Bogue, 1885.
- Smith, Timothy d’Arch. *Love in Earnest: Some Notes on the Lives and Writings of English ‘Uranian’ Poets from 1889 to 1930*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.
- . “On *The Chameleon*: An Essay.” *The Chameleon: A Facsimile Edition*. Ed. G. Krishnamurti. London: The Eighteen Nineties Society, 1978. N. pag.
- The Spirit Lamp*. [Vol.1.] No.I–Vol.4. No.II. Oxford: James Thornton. 1892–93.
- Wilde, Oscar. “A Bevy of Poets.” *Pall Mall Gazette* 27 Mar. 1885: 5.
- . *De Profundis. Complete Works of Oscar Wilde*. Glasgow: Harper Collins, 1994. 980–1059.
- . “The Decay of Lying.” *The Complete Works of Oscar Wilde: Volume 4 Criticism*. Ed. Josephine M. Guy. Oxford: Oxford UP, 2007. 72–103.
- . “A Few Maxims for the Instruction of the Over-Educated.” *The Saturday Review* 17 Nov. 1894: 533–34.
- . *The Picture of Dorian Gray*. Ed. Isobel Murray. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Woods, Gregory. *A History of Gay Literature: The Male Tradition*. New Haven and London: Yale UP, 1998.
- Wratislaw, Theodore. *Caprices and Orchids*. NY and London: Garland Publishing, 1984.
- . *Oscar Wilde: A Memoir*. London: The Eighteen Nineties Society, 1979.
- . “To a Sicilian Boy.” *The Artist and Journal of Home Culture* Aug. 1893: 229.